

サンプル版

霊カン！

憑依その1 全裸疾走霊

作者：金目

目次

製品版概要.....	2
登場人物.....	3
第1話 変態霊憑依！ 強制全裸ランニング より抜粋	3
第2話 忘却不能の背徳 反芻の全裸ランニング より抜粋	10
奥付	14

製品版概要

あらすじ

オナ猿であった過去を恥じ、禁欲的に、質実剛健に生きようとする剣道道場の師範代、三河虎勝。

鍛錬によって鍛え抜かれた男らしい肉体と見事な逸物を備えた虎勝が、性癖への未練を残す幽霊に憑依され、身体を勝手に使われ、性癖のために消費されてしまう。

今回の幽霊の性癖は、野外露出ランニングと野外露出オナニー。

身体を勝手に使われ、近所の城址公園で野外露出行為をさせられた虎勝は、スリルと快感を忘れられず、自らの意志で野外露出ランニングをもう一度行ってしまう。

各話タイトルとプレイ内容

第1話 変態霊憑依！ 強制全裸ランニング(憑依、野外露出、オナニー)

第2話 忘却不能の背徳 反芻の全裸ランニング(野外露出、オナニー)

サンプル版では、第1話と第2話の抜粋を掲載しています。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実には存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、なりすまし・模倣を目的としたA I・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

三河 虎勝(みかわ とらまさ)

剣道道場師範代。26 歳。童貞。

平常時 9.8cm、勃起時 26.5cm のずる剥け。

学生時代、オナニーのし過ぎで亀頭に擦過傷を負ったことがあり、それを恥じてオナニーの回数を週に 2 回と定め、我慢している。

全裸疾走霊

全裸でランニングをしたのち、手コキ絶頂する性癖の幽霊。

性癖への未練から虎勝に憑依し、虎勝の身体で全裸ランニングを行う。

第 1 話 変態霊憑依！ 強制全裸ランニング より抜粋

障子越しに朝日が差し込み、遠くで鶏の鳴き声が響くころ、虎勝は下腹部の苦しさに目を覚まし、上半身を起こした。

虎勝は、大きな欠伸を一つしたあと、頬を両手で叩いて己に気合を入れた。

虎勝は、短く刈り上げた硬い髪の毛と太い眉毛に力強い眼差し、がっしりとした顎をしており、厳つい顔立ちをしている。

髭が生えるペースも早く、黒々とした無精ひげが顎に見える。

毎朝剃っていても、翌朝には無精ひげがチクチクと生えるのだ。

虎勝は、布団から出て大きく背伸びをする。

眠るときは浴衣を着ている虎勝は、がっしりとした体格と厳つい顔立ちから、時代劇に登場する剣客のような雰囲気を漂わせている。

そして、その雰囲気は的外れではない。

虎勝は、剣道道場の師範代なのだ。

26 歳という若さながら、近隣の警察や警備会社の人員への指導も行う、優れた腕前の剣道家なのだ。

虎勝は、箆笥の上に置かれた 2 つの卓上カレンダーを見る。

一つは、今年のカレンダーであり、もう一つは 8 年前のカレンダーであり、ある日付にバツ印が書かれている。

虎勝は、バツ印が書かれたカレンダーを睨みつける。

その日付は、虎勝の人生最大の失態を犯した日であり、虎勝が己の生き方を厳しく改める切っ掛けとなった日でもある。

虎勝は、ふう、と息を吐き、浴衣の帯を解き、浴衣を脱いだ。

優れた剣道家であり、警察や警備会社の人員への指導も行っている虎勝の裸体は、研ぎ澄

まされた刃物のような剣呑さを放っている。

メリハリのある筋肉には、男臭さに溢れる体毛が生えており、男性ホルモンの強さを示している。

特に、へそ下から下腹部への毛は濃く、ごわごわとしており、性欲も強そうだ。

虎勝の性欲を示す傍証は体毛の濃さだけではない。

虎勝の六尺禪の前袋が大きく張り出し、我慢汁でねっとり濡れているのだ。

虎勝は、大和男児としての気風から、常に六尺禪をきつく締めて日々を過ごしている。

六尺禪の縦みつは、雄肉がギチギチに詰まった硬いケツの谷間に完全に沈み込んでおり、締め方のきつさを示している。

にもかかわらず、虎勝の六尺禪の前袋は大きく張り出している。

きつく締めてもなお、勃起で前袋を突き上げるほどに虎勝の逸物が大きく、前袋全体を我慢汁で濡らすほどに、虎勝の性欲は煮えたぎっている。

「くそっ……いつ見てもみっともないな」

虎勝は、前袋のほぼすべてを濡らす我慢汁を見下ろし、ぼやいた。

虎勝は、六尺禪を解く。

バイイイイン！

きつく締められた六尺禪から解放された虎勝の剛直が大きく前後に震えた。

虎勝の剛直は、天を睨みつけるように、鋼の芯が通っているように、一本気に勃起している。

太く、逞しく、裏筋に浮かび上がる尿道も力強い。

亀頭はずる剥けであり、雁首高く、パンパンに膨れている。

鈴口から溢れ出ている我慢汁で亀頭はぬらぬらと艶めき、雁首に留まる包皮を越えて、剛直の根本やごわごわとしたチン毛まで濡らしている。

虎勝の亀頭は、鈴口から半ばあたりまでは綺麗なピンク色をしているのだが、亀頭の下半分から雁首に向かって黒ずんでいる。

特に雁首回りは色素の沈着が濃い。

虎勝の亀頭がグラデーションのように黒ずんでいることには理由がある。

未熟だった頃の虎勝は、オナ猿の中のオナ猿だったのだ。

同年代の男子たちの中でも一足先に精通を終えた虎勝は、オナニーの快感に溺れていた。

隙さえあればシコシコシコシコと、剥けたばかりのチンポを握り、オナニーに耽っていた。

一日にどれだけオナニーをしているかなど、数えるのも馬鹿馬鹿しいほどだ。

朝起きれば、浴衣を脱いで1発、朝の鍛錬前に1発、鍛錬を終え、汗を流したあとの自室でも1発、朝食後にも1発、と、隙さえあればチンポを勃起させ、握りしめ、シコシコしていた。

学校でも我慢できずにトイレでシコシコしてぶっ放したこともある。

帰宅後も、学生服を脱いで1発、夕食後に1発、宿題をしているときの気晴らしに1発、寝る前に1発と、オナ猿ぶりを発揮していた。

それでも、虎勝の溢れ出る性欲は留まることはなく、虎勝は夢精をすることも多く、ムラムラして夜中に目を覚ましては、明かりもつけずにオナニーをしたことも多い。

未熟だった虎勝は、己のオナ猿ぶりを気にしていなかった。

オナニーは男の生理的欲求であり、ザーメンをぶっ放すのは気持ちいいし、なにより、よい気分転換になる。

虎勝は、学業にも剣道の鍛錬にも影響などない、と思っていた。

あの日までは……

虎勝は、己の亀頭の黒ずみを見て、未熟だった己を恥じ入る。

8年前のあの日、剣道全国大会の予選で、虎勝は敗退してしまった。

予選前日の夜、高まる闘志に呼応して増幅された性欲に、虎勝は負けてしまった。

帰宅後に3回、夕食後に3回、風呂の中でも我慢できずに2発、風呂上りにも3発、寝る前にも3発、夜中にも目を覚まし、3発オナニーをしてしまった。

我慢汁が潤沢な虎勝といえども、一晩でこんなにオナニーを重ねてしまっては、手コキ擦過で亀頭に傷を負ってしまう。

翌日の大会予選の第一試合、虎勝は所作の一つ一つで亀頭の裏側がチクチクと痛み、集中力を欠いてしまった。

対戦相手が大会でよくぶつかるライバルであったとはいえ、いや、そんなことは言い訳にはならない。

虎勝は、オナニーに溺れて亀頭の裏側に擦過傷をつくり、その痛みによって集中力を欠いて、大失態を犯してしまったのだ。

その日以来、虎勝は己をより強く戒めた。

オナニーの回数を週に2回と定め、決して破るまい、と己に固く誓い、自室のカレンダーには当時の愚かさを戒める日付を残している。

虎勝が、己のオナ猿ぶりを悔い改めてから、8年が経過している。

それでもなお、虎勝の亀頭の黒ずみは薄れることはない。

オナ猿の中のオナ猿としてシコシコしまくった過去が消えないように、擦過によって沈着した亀頭の黒ずみは、今もなお、残り続けているのだ。

「よし、着替えるか」

虎勝は呟き、箆笥の引き出しから手拭いを取った。

そして、手拭いを己の口に巻き、猿轡としてきつく噛む。

続いて虎勝は、己の金玉を両手で掴んだ。

虎勝の金玉は、剛直の太々しさ、そして、オナ猿だった過去に相応しい大きな金玉であった。

虎勝は、己の金玉を強く握り込む。

「んぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐつ」

噛みしめた手拭いの奥で、虎勝は呻く。

金玉を強く握り込んでいるため、虎勝の腕には太い血管が浮かび上がっている。

虎勝の額にも脂汗が浮かんでいる。

虎勝は、心臓の拍動に合わせて頭の中を殴られているような気分になる。

けれど、虎勝は己の金玉を責める手を緩めることはない。

26歳になってもなお、性欲が盛んな虎勝は、金玉を責めるか、ザーメンをぶっ放さない

と朝勃ちが萎えることはない。

そして、虎勝は、オナ猿だった己を恥じ、オナニーを週に2回と定めている。

だから虎勝は、六尺褌を締め直す前に己の金玉を責め、力づくで萎えさせるしかないのだ。

ゴリゴリと金玉を揉むたび、虎勝は内臓を揉まれているような気持ち悪さに襲われる。

けれど、これは虎勝に必要な苦行なのだ。

大事な大会の、よりもよって予選で、オナニーのし過ぎで亀頭の裏側に擦過傷をつくり、その痛みに集中力を削がれて敗退した、愚かで未熟な己への罰であり、虎勝が男らしく、剣道家らしく、剣道道場の師範代として相応しい生き方をするために、欠かしてはならない試練なのだ。

虎勝の堅固な決意による玉責めによって、虎勝の剛直が萎えてきた。

天を睨みつける意気が失われ、よろよろと萎れた虎勝の逸物は、それでもなお、包皮が雁首に留まっている。

虎勝は天然のずる剥けなのだ。

萎えた虎勝の逸物は、太く、長く、逞しい。

虎勝は己のチンポを測る趣味はなく、無理やり測られたこともない。

だから虎勝は己のチンポの長さを知らない。

オナ猿だった頃は射精の快感にしか興味がなく、オナ猿と決別した後は性的な興味を悪と戒めてきた虎勝にとって、己のチンポが逸物であることなど、どうでもいいことなのだ。

己の逸物が萎えたのを確認した虎勝は、手拭いを口から外し、手の甲で額を濡らす脂汗を拭った。

「さて、褌を締めて、今日も一日、男らしく生きるぞ」

虎勝は決意を述べ、新しい六尺褌を締め始めた。

「はあ……ふう……はあ……ふう……」

虎勝の身体が、生理現象として息をしている。

虎勝の身体は、カラコロカラコロと下駄を鳴らしながら城址公園をランニングしている。

虎勝の身体は、下駄と足袋以外、何も身に着けていない全裸である、虎勝の股間では、逸物が大きく左右に揺れている。

虎勝は、恐怖で肝が縮みあがっている。

虎勝は、露出の趣味などない。

だから、憑りついてきた何者かの勝手な欲望によって全裸でランニングをさせられている現状には、恐怖しかない。

ここは、虎勝の実家である剣道道場と堀を挟んで隣り合う城址公園なのだ。

近所を全裸で走り回っている姿を目撃されれば、虎勝は変質者の烙印を押され、人生が破滅してしまう。

……それが……はあ……いいんだよ……

破滅ギリギリのスリルが……はあ……はあ……たまらないんだよ……

頭の中で囁く声は、興奮しているのかいやらしい吐息が混ざりだしている。

止めてくれ、と虎勝は頭の中で叫ぶ。

身体が勝手に野外露出ランニングを始めてしまったため、虎勝は喋ることも難しい。

虎勝の身体が駆けるたび、虎勝の左右の内股に逸物がビタンビタンとぶつかる。

こんなみっともない姿を見られたら、虎勝の人生はおしまいだ。

幽霊に憑りつかれている恐怖と、勝手に人生が破滅しようとしている恐怖で、虎勝は肝だけではなく、内臓も縮み上がる。

「はあ……はあ……はあ……」

だが、虎勝の身体は、息を乱しながらも、淫溼と全裸ランニングを続けている。

物心ついてからずっと剣道の鍛錬を積んで鍛え上げた裸体が、変態行為のために消費されている。

虎勝の目から、悔し涙が零れる。

虎勝は、こんな変態行為で食られるために、剣道で身体を鍛えてきたのではない。

全裸でランニングをすると、逸物が左右の内ももにぶつかることなんか、知りたくもなかった。

だが、どれだけ虎勝が悔しがっても、虎勝の身体は幽霊に憑りつかれたまま、全裸ランニングを続けている。

虎勝の雄々しい裸体に汗が浮かび、体毛を肌に張りつかせ始める。

ランニングで汗を流す姿は、健全な大和男児と言えるだろう。

全裸でさえなければ。

破滅させられる！ 破滅してしまう！

虎勝は、全裸ランニングを強行する己の身体に恐怖する。

幽霊に憑依されている恐怖、破滅への恐怖が虎勝の頭の中で暴れ出し、虎勝の下腹部は破滅への恐怖で強く、深く、疼きだした。

下駄を履いたままランニングをし続けていた虎勝の身体が眩暈によってよろめいた。

虎勝の身体は、転ばないように足を止め、膝に手をついて姿勢を整える。

虎勝は、この眩暈の感覚を知っている。

逸物である虎勝は、急激に勃起をすると眩暈を起こしてしまうのだ。

膝に手を乗せた虎勝は、股間で逸物が勃起し、雄々しい剛直となっている。

「どうして……」

虎勝の身体がランニングを中断したため、言葉を発する自由を虎勝は取り戻せた。

虎勝は、己の逸物が雄々しい剛直となっていることが信じられない。

虎勝を裏切るように、虎勝の剛直はビグッビグッと小刻みに揺れている。

勃起角度が高く、硬度もあるため、虎勝の剛直は大きさの割に揺れ幅が狭いのだ。

虎勝が呼吸を整えながら見つめる先で、虎勝の鈴口から我慢汁がぷっくりと浮かび上がる。

膨れ上がった我慢汁がぬとっと、虎勝の亀頭を濡らし始める。

虎勝は心臓の拍動を強く感じる。

心臓の拍動に合わせて、虎勝の剛直がビグッビグッと小刻みに揺れる。

心臓の拍動に合わせて虎勝の前立腺が疼き、射精欲が膨れ上がっていく。

「どうして……」

虎勝は、己の中で射精欲が膨れ上がることに恐怖する。

そして、その恐怖が、虎勝の前立腺を強く疼かせる。

抱えられる恐怖の限界を超えた虎勝の身体が種の保存の本能を暴走させ、虎勝を発情させているのだ。

元々、虎勝の性欲は人並み外れた、という言葉でさえ足りないほどに、強く、激しく、獰猛だ。

そうでなければ、朝から晩まで、隙さえあればオナニーをするような性生活を送れるはずがない。

発情した虎勝の獰猛な性欲が、虎勝の大きな金玉を揺さぶり、我慢汁を溢れさせる。

虎勝の剛直は、溢れ出る我慢汁で濡れていく。

……そうだよ、これだよ！

これが最高なんだよ！ 恐怖と隣り合わせの快感！ 性欲！

「たまらねえ！」

勝手に淫らな言葉を叫んだ己の身体に、虎勝は恐怖する。

「さあ、ラストスパートだ！

全身で風を感じるぞお！」

憑りついた幽霊が、虎勝の身体で淫らな言葉を叫んだ。

そして、幽霊は姿勢を正し、両腕を大きく広げる。

ウィングランのように誇らしげに、逞しい胸を張り、腕を広げ、幽霊が虎勝の身体で走り出した。

……止めてくれ！ こんな駄目だ！

こんなことで気持ちよくなっていいわけがないんだ！

虎勝と幽霊の立場が逆転してしまった。

虎勝は、頭の中で混乱し、叫ぶことしかできない。

「ああ、たまらねえ！

全身で感じる風がたまらねえ！

チンポで受ける風がたまらねえ！」

幽霊が虎勝の身体でいやらしく叫んでいる。

幽霊の興奮を示すように、虎勝の顔が劣情に火照っている。

虎勝の剛直は、半分ほど我慢汁に濡れて、淫猥な艶を照りつかせている。

「たまらねえ！ たまらねえ！

チンポがギンギンでえ、金玉がうずいてえ！

人生がけっぷちのスリルが最高だあ！

ああ、これだ！ これが味わいたかったんだ！」

幽霊が、虎勝の身体で淫欲を叫んでいる。

虎勝の裸体は、ランニングによる汗で体毛が濡れて張りついている。

虎勝の剛直は、我慢汁でたっぷりと濡れている。

流れ落ちる汗と、溢れ出る我慢汁で、虎勝のごわごわと濃いチン毛がべっちょりと濡れて下腹部に張りついている。

「ああ、たまらねえ！ 最後に最高のオナニーができるぞお！」

幽霊が、虎勝の身体で最悪なことを叫んでいる。

……ふざけるなよ、お前！

俺の身体で！ 俺の身体なのに……

なんでこんなに気持ちイイんだよお！

虎勝は、幽霊に完全に奪われた身体の片隅で、快感に魂を震わせている。

虎勝の剛直が我慢汁で淫猥に濡れているように、虎勝の金玉が脈動し、虎勝の前立腺が深く疼いているように、幽霊が淫らに叫んでいるように、虎勝の魂も、全裸ランニングの快感に震えている。

虎勝の身体は、全身で受け止める風を気持ちいい、と感じている。

運動の爽快さは、虎勝の魂も知っている。

だが、全裸ランニングで風を受け止める気持ちよさを感じてしまうことは、虎勝にとって恥ずかしく、みっともないことだ。

虎勝の身体は、幽霊の欲望通りに両手を広げ、堂々と駆けている。

虎勝の魂は、金玉が、前立腺が、剛直がいやらしく脈動し、性欲が膨れ上がることに恐怖する。

だが、虎勝の魂が、どれほど恐怖しようと、虎勝の身体が強い快感を享受していることは、我慢汁に濡れた虎勝の剛直が示している。

「ひい……はあ……ひい……はあ……

そろそろ、フィニッシュタイムだな……」

幽霊が、立ち止まった。

幽霊が立ち止まった場所を見て、虎勝の魂はギョッとした。

幽霊が、全裸の虎勝の身体が立ち止まった場所は、城址公園の正門にある職員詰所の近くなのだ。

職員詰所の窓には明かりが漏れており、明かりが不規則に揺らめいていることから、職員がまだ、中で仕事をしているのだろう。

こんな場所でオナニーをする気なのかよ！

虎勝の魂は、幽霊への軽蔑と、人生が破滅する恐怖に叫ぶ。

だが、虎勝の身体は、幽霊に奪われたままだ。

「さあ、最後のスリル、最後の露出、最後の野外露出オナニーだ！」

幽霊が虎勝の身体でいやらしく叫び、我慢汁で濡れる虎勝の剛直を握り込んだ。

やめてくれよおおおおおおおおおおお！

奪われた身体の片隅で、虎勝の魂は叫んだ。

第2話 忘却不能の背徳 反芻の全裸ランニング より抜粋

前触れもなく変態幽霊に憑依され、野外露出ランニングと野外露出オナニーをさせられてから1週間後の夜、虎勝は所用を終え、自家用車を運転して実家である剣道道場に帰宅する途中であった。

普段、剣道着と袴で生活をしている虎勝だが、運転をするときはジャージに着替えている。飾り気のないジャージでも、逞しい虎勝が着用すると、胸板の分厚さや、太ももの逞しさが強調される。

虎勝の自家用車のオーディオからは、演歌が流れている。

虎勝の祖父も虎勝の父も、演歌を好んでおり、虎勝自身も幼い頃から聴いている演歌が耳に馴染んでいる。

ハンドルを握りながら、虎勝は溜息をついた。

1週間前の黄昏時、虎勝は、変態幽霊に憑依され、破廉恥な行為をさせられた。

虎勝の身体を勝手に使った変態幽霊は、野外露出ランニングと野外露出オナニーに満足して消えたようだが、勝手に身体を使われた虎勝は、あの日のことを忘れることができない。

一端の剣道家として、勝手に身体を弄ばれた己の未熟を恥じる思いもある。

幽霊などという胡乱的な存在に一方的に身体を使われたことへの怒りもある。

何より虎勝は、あの日の野外露出オナニーの快感を忘れることができない。

「くそっ……なんて卑しい身体なんだ」

虎勝は、野外露出オナニーの快感を忘れることができない虎勝自身を罵る。

オナニーのし過ぎで亀頭に擦過傷を負ったことを反省して、オナニーの回数を週に2回と定めている虎勝だが、性欲そのものを矯正できたわけではない。

多い日には10回を超えるオナニーをしてしまうほどに、虎勝の性欲は強く、精力も荒々しい。

何よりも、オナニーに溺れてしまうほどに、虎勝は快感に弱い。

剣道道場の長子が、オナニーのし過ぎが原因で予選敗退したことを、強く深く恥じているからこそ、虎勝はオナニーを週に2回と定め、我慢できているだけなのだ。

性欲旺盛という言葉ですら足りないほどに、性欲が強い虎勝にとって、刻み込まれた新たな快感、野外露出オナニーという快感は、そう簡単に忘れることはできない。

今朝は、城址公園で野外露出オナニーをさせられたときの夢を見て夢精をしてしまった。

週に2回と定めたオナニーの日の翌朝だというのに、卑しい虎勝の身体は、きつく締めた六尺褌の前袋から溢れ、浴衣を濡らすほどの射精をしてしまったのだ。

今も、ジャージの下、きつく締められた六尺褌の前袋の中で、虎勝の逸物がギンギンに勃起している。

野外露出オナニーのことを思い出してしまうだけで、虎勝の逸物は、卑しく勃起してしまうのだ。

林を抜け、廃校となった中学校の敷地に入った虎勝は、吹き抜ける夜風を全身で感じた。廃校となって数年しか経過していないため、建物や倉庫にはまだ、往時の騒めきが残っているようであった。

人の営みの気配が残りながらも、人の気配がない。

「都合がいいな」

野外露出ランニングや野外露出オナニーに耽りたいが、目撃されたくないという虎勝の卑しい願望と合致したロケーションに、虎勝は満足する。

そして虎勝は早足でグラウンドに下り、ランニングを始めた。

鍛え抜いた肉体で地を駆けるたび、虎勝は全身に風を感じる。

鍛え抜いた肉体はもちろんのこと、雄々しく屹立している剛直や、ずる剥けの亀頭で感じる風が、虎勝の性欲を高揚させていく。

夜風を切って走る身体で、体毛がそよぐ感覚も、虎勝の性欲を高揚させていく。

あの変態幽霊が、未練を残すだけのことはある、と虎勝は思う。

全裸で風を切って走ることは、体操着を着用してのランニングとは異なる喜びがある。

全身で風を感じる爽快感は、全裸でなければ味わえない。

照明のない夜闇に目が慣れてきた虎勝は、全身に力を込め、駆けだす足を速くしていく。

虎勝は既に勃起しているため、あの時のように左右の内ももに逸物がぶつかり合うことはない。

逸物が内ももにぶつかり合うことがないからこそ、虎勝はより快適に、爽快に、全裸でランニングを行えるのだ。

虎勝は、より早く走る。

「はあ……はあ……はあ……」

呼吸を弾ませながら、虎勝は全裸で走り続ける。

虎勝の屈強な裸体が汗に塗れ、そよいでいた体毛を濡らし、肌に貼りつけていく。

流れる汗が、虎勝の背骨から深い谷間をつくるケツ肉の合わせ目に流れ込んでいく。

虎勝のごわごわと濃いチン毛も汗に濡れて下腹部に貼りついていく。

「ああ……たまらないな……」

虎勝は、全身を汗に濡らし、野外露出ランニングの解放感に満足する。

野外露出ランニングが変態行為であることを、虎勝は今もなお、認識している。

目撃され、咎められなければ問題は無い、という理屈を免罪符にしているだけなのだ。

虎勝は、城址公園でザーメンをぶっ放したあと、職員たちから逃れるために全力疾走をした時のことを思い出す。

全裸で必死に走った。

虎勝の剣道家としての命を、実家の剣道道場の名誉を、虎勝の社会人生命を守るために、

必死に走った。

あれはまさしく、生きるための戦いだったのではないかと虎勝は高揚する。

虎勝の高揚に合わせ、虎勝の剛直から我慢汁がより多く、流れ出る。

大量の我慢汁がぬるぬると溢れ出るたび、虎勝は尿道の中がムズムズとしてくる。

ザーメンが尿道を駆け抜ける快感を連想し、反芻し、虎勝はザーメンをぶっ放したくなる。

だが、まだ駄目だ、と虎勝は射精欲を堪える。

まだ、大して走っていない。

もっともっと、走り込み、肉体を追い詰めた上で野外露出オナニーを始めなければ、物足りないに決まっている。

オナ猿であった虎勝は、剣道の鍛錬後のオナニーが特に気持ちよかったことを良く覚えている。

剣道の鍛錬を終えたあとの最初のオナニーが特に気持ちよくて、名残惜しくて、未練に従い追加のオナニーを行い、ザーメンをぶっ放した日々を過ごしていた虎勝は、肉体を追い詰めたあとのオナニーが気持ちいいことを体感している。

だから、虎勝は野外露出ランニングを続ける。

シコシコしたい！ ザーメンをぶっ放したい！

虎勝の卑しい性欲が、海綿体から叫んでいる。

だが、虎勝の前立腺は、その叫びを無視する。

まだ足りない、まだまだ足りない。

もっともっと肉体を追い詰めた先にこそ、快感が爆発するような素晴らしいオナニーが待っているのだ。

「はあ……はあ……はあ……」

息を弾ませながら、虎勝は真剣な顔をして、廃校となったグラウンドで野外露出ランニングを続ける。

ランニングによって火照る肌を、夜風が慰め、冷やしていく。

その心地よさで、虎勝は、まだまだランニングを続けられる。

もっともっと、肉体を追い詰め、射精の快感を高めなければならない。

虎勝は、必死に腕を振り、地を駆け、全身を汗で濡らし、屹立した剛直を我慢汁で濡らししていく。

虎勝が息を弾ませるたび、虎勝の大きな喉仏が大きく動く。

虎勝の太い首を伝う汗が、虎勝の鎖骨のくぼみに流れ込んでいく。

「ああ、たまらないな……」

全身で……感じる……風が……最高だあ……」

虎勝は、1週間前に憑依してきた変態幽霊と似たようなことを呟いた。

1週間前の黄昏時では、変態幽霊の言葉を否定していた虎勝が、変態幽霊と同じ快感に浸っている。

ランニングによって酷使した肉体を吹き抜ける夜風を余すことなく味わうことができる全裸は、素晴らしいことだ、と虎勝は思う。

淫欲に塗れる剛直が暴発せぬよう、適度に冷やしてくれる夜風が有難い。

虎勝は、全身に力を込め、鍛え抜かれた肉体を酷使する。

流れる汗は、鎖骨のくぼみから溢れ、胸板を伝い、腹筋へと流れていく。

虎勝は、屹立する剛直を握りしめ、衝動のままに手コキをしたくなる。

いや、まだだ。まだ追い込める……

虎勝は、より深い快感を得るために、手コキを求める己の心を押さえ込む。

もっと深く、もっと濃く、もっと素晴らしい絶頂のために、虎勝はもっともっと、身体を追い込まねばならない。

虎勝は、あと3周と定め、トラックを駆ける四肢に最大限の力を込める。

「ふう……ふっ……ふう……ふっ……」

アスリートのように真剣な顔で、短く息を吐きながら、虎勝は必死に駆ける。

鍛え抜かれた四肢は、全裸であろうとも、淫らさではなく、野生の力強さを感じさせる。

大抵の人間が、虎や鷲、鯨を見て、全裸だ、卑猥だと思わないように、虎勝の裸体にも、野生の荒々しさと獰猛さが満ち満ちている。

けれど、虎勝が卑猥な思いを抱く淫乱であることを、虎勝の屹立した剛直が示している。

鋼の芯が通っているようにまっすぐに天を仰ぐ剥けの剛直は、溢れ出る我慢汁に濡れて、淫らに、卑しく、ぬらぬらと艶めいている。

虎勝が、淫らな願いのために全裸で駆けていることを、虎勝の屹立する剛直が喧伝している。

たとえ、虎勝の肉体が、どれほど凄みを放とうとも、その躍動する筋肉が野生の荒々しさを示そうとも、虎勝の屹立する剛直が、虎勝をいやらしい変態であると明かしている。

奥付

サンプル版 『霊カン！ 憑依その1 全裸疾走霊』

初出：2026 年 08 月 12 日

作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに 金目堂サークルページ】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html

【Ci-en 金目堂】

<https://ci-en.dlsite.com/creator/34371>

【金目堂活動報告】 個人ブログ

<https://kinmedo-diary.sblo.jp/>

支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep

同人誌や支援サイトの更新告知に用いています。